

NPO 法人を設立し患者同士で語り合える場を提供



磐田医師の活動で一番特徴的なことは、治療以外の部分でも、患者を膝の痛みから解放するための活動を積極的に行っている点にある。その象徴的な存在が、2009年に設立した「NPO 法人腰痛・膝痛チーム医療研究所」であり、2012年6月に設立予定の「ひざ・こし健康会」だ。腰痛・膝痛チーム医療研究所においては、整形外科だけではなく、東洋医学、サプリメント関連企業、理学療法士、そして補完代替医療関係者など多方面の人々と腰痛、膝痛を改善するという一つのプロジェクトに取り組むことで、患者個々人にとってどんな治療が最適であるかを探り、そこで出された情報や方法を患者にフィードバックするための組織がひざ・こし健康会となっている。

「一人ひとりの患者さんのお話を傾けるには、診察所の中という限られたスペースではどうしても限界がある。そこで患者さんと患者さんをつなぎ、体験者同士で情報を交換したり、最新の情報を得ていただいたり、逆に患者さんの声を聞くことができる場所として、ひざ・こし研究会を立ち上げました。参加者は私自身を含め、全員ボランティアです。将来的にはさまざまな情報を集めて、治療だけではなく、予防医学の分野にも役立てたいと考えています」

<http://hiza-doctor.com>

る。そこで磐田医師は、痛みを点数化し、治療の目安としている。この点数は、自ら立ち上げたNPO 法人「腰痛・膝痛チーム医療研究所」の協力のもと行った患者アンケートに基づき作成されたもので、点数によって、膝関節内注射や手術など、どんな治療を適用するかを決定する一つの目安としている。これまで、患者自身に手術をするかどうかを選ばせ

ることが多かったが、それではなかなかふんぎりがつかない現実があった。しかしながら、自分の痛みや生活レベルがどの程度のものなのか？を客観的に知ることができ、患者本人にとって一大イベントである手術の決断に対する一つの目安になってくれれば、と考えている。ただし、「患者さん個々の年齢や生活環境によって、どこまでの回復を望

DATA 磐田振一郎医師が現在診療を行っている病院一覧

米倉脊椎・関節病院

〒123-0873 東京都足立区扇3-13-14
TEL●03-3855-4154
<http://www.spine-joint-yhp.jp>

医療法人石井会 石井病院

〒372-0001 群馬県伊勢崎市波志江町1152
TEL●0270-21-3111
<http://www.ishii.or.jp>

医療法人茨城愛心会 古河病院

〒306-0041 茨城県古河市鴻巣1555
TEL●0280-47-1010
<http://www.kogahosp.jp>

公益社団法人 台東区立台東病院 地域医療振興協会

〒111-0031 東京都台東区千束3-20-5
TEL●03-3876-1001
<http://www.taitohp.jp/taitohp>

医療法人社団隆峰会 墨田中央病院

〒131-0046 東京都墨田区京島3-67-1
TEL●03-3617-1414
<http://www.sumida-chuou-hospital.or.jp>

5つの病院で診療を行う独自のスタイルを確立

現在、磐田医師は5つの病院で診察や手術を行うことで、患者が足を

「徹底的に患者目線を貫く姿勢が、こうした診療スタイルにも表れているといえる。」

むのかは異なります。たとえ関節が壊れた状態のままであっても、とにかく痛みから解放されれば良いという人もいれば、これからまだまだ山登りだつて楽しみたいという人もいます。また、レントゲンに写った膝の状態と痛みの感じ方も大きく異なる場合が少なくない。レントゲンで見ると、もう痛くて歩くのも大変だろうと思える人でも、それほど痛みがないという場合もあれば、少しの痛みでも激しく不快を訴える人もいます。ですからレントゲンの状態で治療方法を選択するのではなく、患者さんが訴える痛みの程度によって治療を選択するようにしています」といふ。

「膝の痛みは患者さんにとって大変つらいものですが、がんといった疾患と違い、手術をしなければ命を失うという性質のものではありません。だからギリギリまで我慢して、ようやく手術をしてでもと決意して病院に電話をしてみたら、診察までに1年待ち、手術にはそれからさらに2年待ちなどといわれる場合が実際にあるんです。すると出鼻をくじかれた患者さんは、再び病院から足を遠ざけてしまう。それならば患者さんに向いてもらうのではなく、医師自身が患者さんのもとに向かうと、現在のようスタイルをとっています」



責任をもって痛みから患者を解放する 人工関節置換術はそのための最終手段です

整形外科 磐田 振一郎 医師

侵襲を最低限に抑えつつ安全な人工関節置換術を実施

「私のところに来た患者さんの膝の痛みに対しては徹底的に責任を持ちます」と語るのは、膝関節疾患の治療に取り組む磐田振一郎医師だ。その磐田医師が「痛みをとるための最終手段」と指摘するのが人工関節置換術である。

磐田医師は、人工関節置換術において、筋肉や軟部組織（皮膚など）への負担をできるだけ最小限にとどめることができる最小侵襲人工関節置換術（MIS）を採用している。

「MISは、従来の手術法に比べて傷口が小さく、筋肉や組織に対する侵襲も最小限にとどめることができる方法です。ただ、傷口を小さくすることばかりにこだわって、いわゆる暗闇手術になってしまうと



磐田 振一郎 医師

いわた・しんいちろう●1996年、慶應義塾大学医学部卒業。同年、慶應義塾大学医学部整形外科学室・慶應病院勤務。2004年、スタンフォード大学工学部留学。09年、特定非営利活動法人腰痛・膝痛チーム医療研究所設立。現在5つの病院で診療を行う。日本整形外科学会認定整形外科専門医

「つ傷口を最小なものにするために、傷口10cm程度で手術を行っています」

「しかし、磐田医師は、すべての症例に対して手術だけを患者にすすめることはしないという。まずは痛みの程度を客観的に測り、整形外科的アプローチ以外の治療方法があることもきちんと説明する。そして、手術以外の方法で痛みをとることが困難と判断されたケースについてのみ、手術を行っているという。」

治療の目安となるのは患者の痛みの感じ方

しかし、痛みというものは、その程度を人に伝えることが難しい上に、人によって感じ方も大きく異なる

運ぶのではなく、医師が患者の中に飛び込むスタイルをとっている。

「膝の痛みは患者さんにとって大変つらいものですが、がんといった疾患と違い、手術をしなければ命を失うという性質のものではありません。だからギリギリまで我慢して、ようやく手術をしてでもと決意して病院に電話をしてみたら、診察までに1年待ち、手術にはそれからさらに2年待ちなどといわれる場合が実際にあるんです。すると出鼻をくじかれた患者さんは、再び病院から足を遠ざけてしまう。それならば患者さんに向いてもらうのではなく、医師自身が患者さんのもとに向かうと、現在のようスタイルをとっています」